

2013年5月20日

文部科学省研究振興局ライフサイエンス課生命倫理・安全対策室  
「第一種使用規程承認申請案件に対する意見募集」担当 御中

「第一種使用規程承認申請案件に対する意見」

食のコミュニケーション円卓会議  
代表 市川まりこ

意見1 今回のパブリックコメントの対象となっているカルビンサイクル強化イネ (FBP/SBPase 発現イネ)、複合病害抵抗性イネ ((WRKY45遺伝子発現イネ)、開花期制御イネ)の第一種使用等に関する承認に賛成します。

理由1 : 遺伝子組換え技術は従来の品種改良の限界を超えて優れた品種を開発できる技術です。これらの研究は、将来の日本の農業に役立つものと期待されますので承認されることを希望します。

理由2 : 日本もTPP交渉に参加することが決まり、多くの農作物で関税撤廃により安い農作物が輸入される恐れがあります。そのときまでに競争力を持つ本当に強い農業に生まれ変わる必要があります。複合病害性イネなどはコスト削減による競争力を増強するに資する可能性があります。強い農業を実現するために遺伝子組換え技術の発展に期待します。

意見2 迅速な承認システムを構築してほしいと思います。パブリックコメント対象となったイネ系統は、学識経験者により十分に安全性が確認されていると思われるので、パブリックコメント後、速やかな承認をお願いします。

理由 : 今回のパブリックコメントの対象となったイネ系統は、3月6日に学識経験者の意見聴取があったはずですが、パブリックコメントの開始が4月22日と非常に時間がかかっています。イネは遅くとも6月中に栽培を開始する必要があるはずなので、きちんと研究を進めようと思うなら、安全性を十分に確保しつつも栽培適期に間に合うような迅速な承認システムを構築してほしいです。今年度については、承認しても栽培適期を逃すようでは栽培の意味がなくなりますので、パブリックコメント後に速やかな承認をお願いしたいと思います。

意見3 申請書等における無駄の排除をお願いします。

理由 : カルビンサイクル強化イネは4系統、複合病害抵抗性イネは7系統の申請がなされていますが、各遺伝子組換えイネのデータ以外で、例えば「第一 生物多様性影響の評価に当たり収集した情報」は同じもので、それを、それぞれの申請書毎に付けるのは無駄だと思いますし、申請者の負担も大きいと思われます。もっと省力化できるはずですので、改善を望みます。

意見4 緊急措置計画において業務管理責任者等の氏名の公表で、カルビンサイクル強化イネと他の申請書で書かれている内容が大きく異なりますので、統一するべきではないでしょうか。

理由：研究独法間で、これだけ開示する情報が異なることに違和感があります。個人情報保護の観点で、非正規職員の名前や電話番号を隠すのは理解できますが、組織の職員全員を隠す必要があるでしょうか。研究独法間だけでなく民間企業も含めて、緊急措置計画における氏名の公表は信頼性にもつながるので、なんらかの統一したルールが必要と思います。

意見5 カルビンサイクル強化イネと開花期制御イネでは、研究の目的がよく分かりません。また食品安全委員会でも承認されてない抗生物質耐性遺伝子（ハイグロマイシン）を使っていると言うことは、研究のための研究で実用化は考えてないと言うことでしょうか。

理由：一般市民からすると、カルビンサイクルを強化するとどうなるのか、開花期制御ができると、どのようなメリットがあるのかがよく理解できません。最終的な目的が分かると、もっと応援も出来ると思います。また、ハイグロマイシン耐性遺伝子を使っていることで、実用化は考えてないのかと残念な気持ちになりますが、結果が良ければ作り直すのでしょうか、それともハイグロマイシンで遺伝子組換え食品としての安全性の承認を取るのでしょうか疑問です。

意見6 カルビンサイクル強化イネの生物多様性影響評価では、正確な記載をお願いします。また、有効分げつ数が増加しても既存の品種の範囲内であれば、遺伝子組換え技術を使う意味があるのでしょうか。

理由：カルビンサイクル強化イネの各系統によって有効分げつ数が異なります。生物多様性影響評価において、「本遺伝子組換えイネは、最終的に非組換え体に対し有効分げつ数の有意な増加が認められているが、それらの値は品種間差を越えるものではない。」とあります。しかし、系統によっては有効分げつ数は増えて無いか、むしろ減少しているのではないのでしょうか。この点は、本質的な生物多様性影響評価に影響を及ぼすところではないと思いますが、もっと丁寧に申請書を書かれることと審査されることを希望します。なお、素朴な疑問ですが、もしも従来の品種を超えるものでなければ、わざわざ遺伝子組換え技術を使う意味があるのでしょうか。

私たちは遺伝子組換え技術の重要性から是非とも研究も実用化も進めてほしいと思いますが、技術は必要な場面で適切に用いるべきもので、従来品種と代わらないなら、敢えて遺伝子組換え技術を用いる必要はないと思う次第です。

以上